

このたび山内繁勝君が eSUN という日本語のEラーニングシステムを発表しました。



中谷 巖

多摩大学 学長

語学教育は自分自身でやれる部分、というより、自分でやるべき部分がかなりあります。特に、ITの進んだ昨今では、その独習できる部分が大幅に増えました。eSUN はそれを最大限活用しようという野心的なものです。

彼が日本語教授法を勉強するために、脱サラ後わざわざ米国のコーネル大学に飛んだのは正解だったと思います。外の目で日本語を観るからです。「外国に行ってはじめて自国のことがよく見える」というのと同じ理屈です。コーネル大学で彼は目から鱗の体験をしたと言っています。

日本は世界的にみてその地位が相対的に低下しているとはいえ、まだ世界第2の経済大国です。従来日本ならではの物づくりのよさに加えて、アニメや音楽など新しい文化の発信で、新たな親日外国人も創出しています。それに伴い、日本語に対する興味も根強いものがあります。

グローバル化に伴い、英語の弱い日本人が海外赴任することも珍しくなくなりましたが、現地の人たちが日本語を話してくれたらこれほどラクなことはありません。

また、迫り来る高齢化を控え、外国人の積極活用も考えなければ日本社会が機能しないことは明白ですが、そのためには日本語ができ、日本社会にきちんと対応できる外国人が必要です。日本語には日本人の心模様が言語の仕組みに織り込まれていると同君は説きます。言語と文化は不可分だというのは山内君の持論です。

現在「グローバル化」がひとつの世界的なキーワードになっていますが、これは限りなく「アメリカ化」に等しいものとなっており、ある意味でとても危険なことであります。それに対峙するものがないからです。その意味で、文化的にはアメリカとは両極端にある日本の価値観や伝統がカウンターバランスとなりうるかもしれません。

私と同君とは、一橋大学の国際部というクラブの先輩・後輩という関係で、英語による討論、英語劇制作などを一緒にやった仲間です。その頃、語り合った理想がまたひとつ実現するかもしれないと思うと心躍るものがあります。

中谷 巖